「須陀拏太子」説話の受容

松本光隆

はじめに

「須陀拏太子」説話は、釋迦の本生譚として、車馬戝衣服をはじめ妻子までを布施した一種の衝撃的な物語と言えようが、この「須陀拏太子」説話は、本邦の説話集にも採られている比較的に一般的な説話でもある。本稿は、石山寺蔵太子須陀拏經平安中期點を中心に、受容された本邦説話集所載の説話とを比較して論じようとするものである。

一、類話の所在

「須陀拏太子」説話の、本邦においての管見に入った類話には、三寶繪詞・九冊本寶物集所収のものがある。その他には、私撰百因縁集の中の、「釋尊往因難易二行阿私仙人ノ事」として収載された中に、須陀拏太子に觸れた一条がある。

○加之諸經論ニ又演ル釋迦ノ往因ヲ。自ラ捨カヘリミル勇猛ノ志ヲ。時トシテ不休息ニシテ給ハ。（中略）須太拏太子トシテハ檀度ヲ先トシテ貧者ニ与ヘ妻子象車ヲ。（下略）

（大日本佛教全書）

とあり、正に當該説話より出でたものであると考えられる。

九冊本寶物集では、

○攝波羅國の王の子おはしき。名を須多拏太子と申き。施にこゝろざしありて、たからをおしむ事なし。一國の珍寶、こふ人ごとにあたへ、四千人の大臣、此事をかたぶきて云、國の寶うせなば、必國おとろふべし。國おとろへなば、異國の爲にとられんとき、いかゞあるべき。ねがはくは、太子を檀とくせんに

こめ奉らん、と奏しければ、大王、此大臣の申むねにまかせて、太子を檀とく山へやり奉り給ふ。勅勘に恐れて、御供にまいる人もなかりければ、太子女御ばかりと、九になり給ふ女宮をさきにたてゝ、檀特山へ入り給ひける。太子、檀特山にして恭敬礼拜して祈り給ひければ、女御は、谷の水を結び、澤の若菜をつみて、やしなひたてまつりけるほどに、鳩留國の翁とて、老人來て云く、君、施に心ざしおほするよしをうけたまはる。我、老おとろへて、つかふものなし。ねがはくは二人の子を給はつてつかふべし、と申ければ、是をおしむものならば、我願やぶれぬべし、とらせてやりては、母の女御、峯の木の實をひろひ、澤の若菜をつみ歸り來て、いかなる事を思わんずらんとおぼしめしわづらひながら、二人の御手をおきなにとらせてやりにまひければ、ならはぬ御心に、恐ろしげなる翁のぐして行けば、ゆかじとてすまひ給ひければ、きのふまでこそ太子の御子なれ、けふはわが從者なり、とて、二人の御子をしばりて、さきにたてゝゆきければ、こゑをたてゝおめき給ひけるを聞給ひけん、さすがに哀と思しけんかし。扨、後には女御をも人のこひければ、とらせて給ひてけり。とぞ申侍りめる。こまかには、須陀那經、六度集經にぞ侍りめる。

（古典文庫）

とある。太子須陀拏經と比較するとかなりの相違が存している。九冊本寶物集の言語量そのものが、太子須陀拏經に比較して絶對的に少ないという理由から生じる、太子須陀拏經に比較しての九冊本寶物集における筋運びの簡略性は別として、例えば、太子須陀拏經では、太子が檀特山に流される契機となったのは、國の寶の白象を敵國に與えたことであるのに對して、九冊本寶物集では、抽象的原因を提示し、太子の布施により國力が低下するという大臣の危機感からであるとする。九冊本寶物集では、鳩留國の翁に子を施す場面に全体の半分以上の紙幅を割き詳述する。その後は、「扨、後には女御をも人のこひければ、とらせて給ひてけり。とぞ申侍りめる」とあるのみで、太子須陀拏經に存するような帝釋天の加護によって二子は本國に歸り、また、太子も妃とともに無事本國に歸り着くといった結末部分は完全に缺落している。九冊本寶物集に存する。

○きのぶまでこそ太子の御子なれ、けふはわが從者なり

とある發言は、鳩留國の翁が、從って來ようとしない二人の子供に對して説得する時のものである。これに對して太子須陀拏經に認められる

○本ハ大王の孫爲(ナ)ラき。今は人の奴婢と爲(ナ)リ（タリ）。（388～389）

とあるのは、二人の子供が本國に歸り大王の前での男兒耶利の發言である。大王が子供を抱こうとするのに對する拒否の理由である。兩者の構造・内容共に類似しているが、使用場面が異なる。九冊本寶物集では、子を翁に與えようとする時、太子には、自分の願を通す事と子供を布施した事を知った時の女御に對する憐憫とでの葛藤が存したと描き、また、翁に引き立てられる子供を「さすがに哀と」思ったであろうと推測しているが、こうした記述は、太子須陀拏經には存していない。

右の如く、太子須陀拏經と九冊本寶物集の間にはかなりの隔りが存するようである。こうした異同の要因は、本邦における説話の改變に起るものであろうと推測される。

二、三寶繪詞の「須陀拏太子」説話

「須陀拏太子」説話は、三寶繪詞にも採られている。三寶繪詞と太子須陀拏經とを比較すると、それぞれ異同出入が存する。その一因は、三寶繪詞の出典と關係するものと考えられる。三寶繪詞所收の太子須陀拏の説話話末に、

○太子須檀那經六度集經等ニ見タリ

とあり、出典を明示している。九冊本寶物集の話末にも同種の記載が存するが、これに從うと、三寶繪詞登載の「須陀拏太子」説話は複數の出典を有する事となる。この他、法苑珠林に認められるが、法苑珠林の卷第八十通世部第四の登載話は、太子須陀拏經からの抄出であり、出典としては六度集經と太子須陀拏經・法苑珠林との二系統が想定されることとなる。この「須陀拏太子」説話の出典については、先學の御高論が存する。その御高論では、兩者共に三寶繪詞の「須陀拏太子」説話の生成に關與している旨を説かれ、六度集經は三箇所の例示によって關しているとされる。一箇所は、兩兒を布施した後

の妃の太子に對する發話部分であり、今一箇所は該當話末尾部の記述である。詳細な比較を加えると、例えばたの如き部分も六度集經に取材したと判斷されるものと考えられる。

（三寶繪詞）

①昔折波四國ノ王只獨ノ子有キ須太那ト云キ形勝ヒヲ如燭シ心ヲ深ク人ヲ憐ビ不貧キ人近キも遠キも集リ來ル物ヲ乞フ王ノ賊免ルシ任セ隨ヒテ必ス与フ

（六度集經）

昔者葉波國王號曰濕隨其名菩薩。治國以正。梨庶無怨。王有太子名須大拏。容儀光世。慈孝難齊。四等普護。言不傷人。王有一子寶之無量。太子事親周之於天。有知之衆。常願布施拯濟群生。令吾後世受福無窮。愚者不覩非常之變誦之可保。

（太子須陀拏經）

往昔過去不可計劫時。有大國名爲葉波。其王號曰濕卑。以政法治國。（中略）太子便生（中略）便守太子爲須大拏。（中略）太子至年十六書計射御及諸礼樂皆備。（中略）太子少小以來常好布施。（中略）太子卽使傍臣聲取珍寶著四城門有智之士照有五家。乃尚布施之士。十方諸佛緣一覺無所著尊靡不歎施爲世上寶。太子遂普普施。惠逮衆生。欲得衣食者應聲惠之。金銀衆珍車馬田宅無求不與。光聲遠被。四海咨嗟。

②王一ツノ白キ象有リ力六十ノ象ニ等シ賊國ニ來リ戰フ時ニ此象勝ツ

父王有一白象。威猛武勢辟六十象。怨國來戰。象輒得勝

共集議言。葉波國王有行運華上白象名須陀延。多力健鬪每與諸國共相攻伐此象常勝。（中略）臣復白王（中略）

此象勝於六十象力。

③賊、王謀リ事ヲ成ス鹿、皮ヲ著杖ヲツ木太留貧キ物八人ヲ造ラ太子、許ニ遣テ此象ヲ令乞ム

諸王議曰。太子賢聖無求不惠。遣梵志八人之太子所令乞白象。若能得之吾重酬子。受命即行。著鹿皮衣履屐執瓶。跋枝遠涉歷諸郡縣千有餘里到葉波國。

道士八人即行持杖。遠涉山川詣葉波國。

最初よりの三例を例示したが、①例の傍線部は、六度集經の傍線部に對應し、太子須陀拏經には太子のこうした形容が見當らない。①例の三寶繪詞の前半部分の行文は六度集經に近いようであり、後半部分の行文は太子須陀拏經に近いようである。

②例では、三寶繪詞が地の文であり、六度集經も同じく地の文であるのに對して、對應する太子須陀拏經の部分は會話部に見出される。又、傍線部の白象の形容は、太子須陀拏經ではかなり後の部分に出現し、太子を讒言する大臣の發言中に見出されるものであり、この部分も六度集經との關係が想定される。

③例では、八人の道士の形容として三寶繪詞に存する「鹿、皮ヲ著」に對應する記述が太子須陀拏經には見當らない。

右の如く、三寶繪詞の生成に六度集經が關與したことは拒めない。但、全体に亙って見ると太子須陀拏經との關係が優先するようであり、筋立ての骨組に太子須陀拏經を用い、脚色の段階で六度集經を組み入れた如くにも考えられる。

六度集經にも、太子須陀拏經にも見出せない部分も三寶繪詞中に存する。例えば

○（翁）丁寧ニ乞フ事三度ニ至ル太子涙ヲ落ス子ヲ思フ事モ无限ク翁ノ悲フ事モ彌ヨ深シ遥ニ馮テ來リ所願ヲ不違ト宣フ

とある部分で、兩兒を布施する時の太子の心境を記した傍線部の如き記述は、六度集經にも太子須陀拏經にも見當らない。こうした異同は、心の葛藤などの添加による

具體性の附與、つまり物語性に厚みを増すための營爲とも理解される。

三、佛說太子須陀拏經平安中期點と三寶繪詞との比較

三寶繪詞に登載された「須陀拏太子」說話は、右の檢討からも、太子須陀拏經が單獨・直接の出典ではなく、他にも出典が存し、又、三寶繪詞の作者の作意も含まれることが理解されたが、以後には、佛說太子須陀拏經平安中期點と觀智院本三寶繪詞とを二・三の言語的側面から比較しようとしたものである。

三寶繪詞の表記形態は、自立語については本行に漢字で表記し、附屬語・活用語尾は片假名割書するのが普通であるが、中に万葉假名・片假名に依って本行に表記された自立語が存する。當該說話中には

アヤフシ　イヅレ　イヌ（イモネズ）　イマス　カク　キユ　タダル　ツク　ナヅム　ナドテカ　ナヘグ　ハルカニ　ヒルム　フセグ　ユガム

の十五例が存する。この内の五語については、佛說太子須陀拏經中に語としては使用されているものである。

（三寶繪詞）

〈イヅレ〉

伊ツ礼ヲモ可憑キ不有ス　（37ウ）

〈イマス〉

木ノ實ミヲ食ナシテ伊坐スト云フ　（40オ）

〈カク〉

今加久悲ヒ云ヒテ（38ウ）

〈ツク〉

杖ヲツ木太留貧キ物　（33オ）

〈ハルカニ〉

ハルカニ遠リカテ（34オ）

（佛說太子須陀拏經平安中期點）

何そ保ち守る可き（289）

菓蓏菜茹（ヲ）食トシ皮褐ヲ服飾と爲（394）

杖を持ツイて　（54）

の五例であるが、「ツク」の例の除いてその部分の對應箇所が太子須陀拏經の方に存しない。他例は

〈アヤフシ・イヌ〉

物モ不食ズ　いモ爾テスシ年ヲ送リ月ヲ送ルニ形モ每

日劣リ疲テ命ヲ既ニあや
ふきニ望ミ　（40ウ）
〈キユ〉
神ヒき江テ心失リテ（35オ）
〈タダル・ユガム〉
目多〻礼ロヲ由加女利
（36オ）
〈ナヅム・ヒルム〉
遠リ奈ツミ歩ミル身擧ヲヒ
留ミ痛シ　（36ウ）
〈ナドテカ〉
王那止天カ然可有ト問ヒ
給ヘハ　（40オ）
〈ナヘグ〉
年老テ力少シ足ナヘキ難歩
シ　（37ウ）
〈フセグ〉
象ハ賊ヲ不世久時也
（33ウ）

両の目復青し。面皺み唇は
咎レリ。（225）
我は遠方從來れば身（ヲ）擧
（ケ）て皆痛し。（266）
何の故（ニ）か男は鈍シクし
て（而）女は貴キ（耶）（391）
我は老（イ）て且羸レタレハ
（292）
敵（ヲ）却くる（之）寶の象を
は　（82）

右の如くで、「ナドテカ」を除いて、當該語に對應する部分に該當の語が見出せない。最後の例も場所が違う例であって三寶繪詞に對應する箇所に「フセグ」に該當する語が見當らない。先掲「ツク」も佛說太子須阿拏經平安中期點の本文の用字が「持」であってみれば、この字の常用訓が「モツ」と認められる點から、三寶繪詞の万葉假名・片假名等の自立語表記には、三寶繪詞の生成過程における作意が認められると考えられる。

以下には、両資料間における所謂疑問・反語を表わす副詞・連體詞の比較を示すこととする。

（三寶繪詞）

（イカガセム）
何ヵ爲ム
（イカシテカ）
（イカデカ）
何カテ得ム
爭ヵ有ルト
（イカナル）
何ルカナ罪ヲ
（イカニ）

奈一何カシテカ（293）、
何なる所にしてか（393）

（イカニセム）	何（ニ）說（カム）（261）	誰ニ（ナゼニ）	誰にか（320）
	何（ニ）せむと（91）		爲ニソ（259 368）
	何ーゑ如（ニ）せむと（85）		何故（ニ）そ（388 391）
（イカニゾ）	何か（ニ）そ（390）	（ナゾ）	何ーゐ爲ニに（345）
	云何（ニ）そ（97）		何ソ乎（265）
	奈ーいか何（ニ）そ（293）		那ナそソ（111）
（イツカ）	何カ（201）	（ナドテカ）	奈ーナ何ソ（273）
（イヅチ）	何チ去ツ	那止天カ	
（イヅレ）		（ナニ）	何の（59）
	何れの（58）		何に（72）
伊ツ礼モ	何等（レ）を（393）	何ニ依テ	何か（103）
（イドコカ・イドコニカ）		（ナニコト）	
	爲ーイト所コカ（316）	何事ニ依テ	
	爲ーイト所コニカ（244）	何事カ	何そ（158）
（タレ）		（ナニゾ）	
誰カ	誰か（340）		

右の比較の結果、三寶繪詞に出現するのは九語、佛説太子須阿拏經平安中期點には十三語が出現するが、両資料に共通に出現する語は「イカナル」「イヅレ」「タレ」「ナニ」の四語である。太子須阿拏經が三寶繪詞の出典である事を考慮すれば、その一致率は必ずしも高いものとは言えないと考えられる。

右の相違は、一つには佛説太子須阿拏經が平安中期の資料であり、一方、觀智院本三寶繪詞が鎌倉時代の書寫に依るといった時代差が存するのかも知れない。又、三寶繪詞の出典と目されるものは、太子須阿拏經だけではなく、今回比較に用いた天台宗の系統であると考えられる石山寺藏の佛説太子須阿拏經平安中期點の訓讀語が、三寶繪詞の出典となった太子須阿拏經とどれほどの相關關係にあるかなどの問題が存している。

本來三寶繪詞が、源爲憲によって永觀二年に尊子内親王に奉ったものであるとすれば、尚更に生成事より、出典となる漢譯佛典を改變して、作意を加えて作成した可能性も存する。こうした營爲により、出典となった太子須阿拏經そのものの訓讀語とは異なった要素を有するようになったものであろう。今昔物語の如く比較的出典との逐語的比較が可能であると考えられる資料と異なり、骨組・筋立てを主として出典に依り、逐語的には出典に従わないといった三寶繪詞の説話受容の態度に、本邦における説話改變の營爲の一つの在り様を認める事ができるものと考えられる。

（注）

注1　小泉弘・高橋伸幸『諸本對照三寶繪集成「三寶繪の研究」』（昭和五十五年六月）